



特定非営利活動法人「リノ」超学校

2025(R7)年度事業報告書

総括

(事業年度：2025年4月1日～2026年3月31日)

団体として13年目、特定非営利活動法人(NPO法人)として3年目の事業を実施、完了した。事業内容自体は大きな転換期となったが、定款の示す

1. 個人、NPO、行政、企業等、多様な主体で行う地域課題解決に向けた協働のまちづくりを行う中間支援、コーディネート事業
2. 地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う教育事業
3. 住民が自由度の高い芸術・思想活動を行うための機会創出事業
4. その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

は逸脱せず実施している。いずれもミッション「地域で生きる人材を育成する。」「正直者がバカを見ない地域社会を実現する。」に基づき宮城県内や利府町内において市民及び各主体の自己実現という角度から地域の活性化を目指すものであり、またそのような仕組みや機会創出に町ぐるみで苦慮する状況にあるため、これを地域課題として先進的に行っている。しかし、医療や貧困課題のような活動分野のように、今日・明日に誰かの命が失われるような緊急性の高い課題ではないため、地域課題としての認識、周知に相当の創意工夫が必要であり、素早い広がりを見せることは依然として容易ではない。

しかしながら、法人としての3期目の活動を行い、これまでと異なる社会的責任や信用、そして期待と信託を負い、また関わるステークホルダーの拡大し事業内容の拡大も見られるため、本年度は新しい試みが多くミッション達成への歩みは進んでいる。

それにより前年度、最も課題とした「基幹事業の活性化」はステップアップに終わりはないものの現状達成できていると言える。特に市民活動研究会事業では中間支援を核とするこの法人の取り組みの本丸であり、市民活動の促進や市民協働のまちづくり実現に対して当事者の生の声で合意形成を育む活動ではあるが、“生の声”を集めることが難化傾向にあったが、研究会の運営スタイルを刷新し、結果的にプロジェクト数や活動数、参加者層に広がりが生じた。

教育機関やメディアからの相談や問い合わせ、取材など法人へのアプローチは今年度もあり、活動の周知や「メニュー」となるものも常備出来ている。

一方で講師の派遣は、法人の理念や市民社会のあるべき姿を各主体に伝達する最も効果的な手法であり、年度初頭の定例総会ではこれの増を目標としたが伸び悩んだところである。また企業セクターとのネットワーク構築は今年度も一朝一夕でできる容易なものではなかったが、これは当法人のみならず東北や宮城の共通課題でもあり、地域課題として捉え直し、今後は行政等との協働にて課題解決に取り組む必要がある。

今年度のもっとも大きな変化は、宮城県の事業(プロポーザル)に初めて応募を挑戦し、初めて採択され、初めて実施を行ったところにある。ここに大きなウェイトが割かれたが、これは宮城県の市民社会に寄与するのみならず、大は小を兼ね利府町の市民社会に寄与するものであり、事業に関わったすべての主体に効果が得られたと評価している。

事業報告

1. 個人、NPO、行政、企業等、多様な主体で行う地域課題解決に向けた協働のまちづくりを行う中間支援、コーディネート事業

(1) 利府町市民活動研究会

【趣旨】

2026年現在利府町内では市民活動やNPOの中間支援なる仕組みを公的に有しておらず、当法人が民間中間支援組織としてポジショニングする。これにより市民協働のまちづくりが停滞する部分を促進に転換させるべく、2021年度から本事業を行い、現在の町内外活動者/潜在活動者のコミュニティを運営し、情報交換や合同研修、ケース検討の場として、本来のそれぞれの団体活動運営の一助と位置づけ、将来的に行政や企業等他セクターを巻き込んだ協働のまちづくり目指している。

【実施結果】

今年度は旧市民活動研究会を2つのチームに分割して活動を実施した。ひとつは旧市民活動研究会にて長期目標であった政策提言の原案書を作成・検証を反復する「分科会」チーム。もうひとつは市民活動に興味がある(既に活動している)方もそうでない方も気軽に参加し、ランチを囲みながら暮らしの良い話や困りごとをおしゃべりし、これによって町民の声を収集し合意形成する対話の場、coffe「しゃべってみっぺ」チームである。特に後者は広報や現場で使う語に市民活動、NPO、まちづくりなどの語を用いず、これらに抵抗がある方も参加できるよう努めた。前者の分科会チームは原案書が一定の形になるまでさらなる研究と議論、時間が要され継続的かつ長期的な活動が次年度も続く計画でいる。

実施日	実施場所	参加人数	チーム	内容
7月29日	利府町文化交流センターリフノス	-	分科会	<p><オリエンテーション></p> <p>これからの研究の進め方と目指す着地点について。</p> <p>基本的にはコアメンバーの3名の都合、気分などを軸に進める。原案書の研究手法は暫定的に国語や英語の授業で経験したパラグラフリーディングを採用。</p>
8月27日	利府町文化交流センターリフノス	-	分科会	<p><研究活動></p> <p>『利府町での「市民活動促進」「市民協働社会推進」を地域のみならずで理解する一定の共通認識を明文化するための提案書』暫定下書きののパラグラフリーディング。</p> <p>[前文；原案の趣旨目的]を精査。パラグラフA～Fまで。住民参加から協働の時代への変遷、一般的な語用「市民活動」と利府町が使う「町民活動」の違い、提案書のこどもでも使える平易化(そこから次世代の担い手が生まれる好循環)の手法等々について議論。</p>
10月1日	利府町文化交流センターリフノス	-	分科会	<p><研究活動></p> <p>パラグラフリーディング。</p> <p>[前文；原案の趣旨目的]を精査。パラグラフGまで。市民セクターへの偏見をなくすことを目指す文言の議論。市民活動の搾取的・排他的扱い、ボランティアが多く本業との両立は大変では？→きちんと団体に委託という協働を取り一定の生活保障もあっては？男女共同の認識に世代間ギャップ等々について議論。</p>
10月22日	利府町文化交流センターリフノス	-	分科会	<p><研究活動></p> <p>パラグラフリーディング。</p> <p>[前文；原案の趣旨目的]を精査。パラグラフGの続き。市民vs市民まちづくりに興味があったり活動をしている市民と無関心層の協働をどうするか、地域コミュニティ組織と市民活動団体の相互補完について、部活動の地域移行について、中間支援施設の必要性について、行政の「協働関係」部署の権限について(1つの専門部署として固定されるより、他部署を横断できるポジションのほうが望ましい)等々について議論。行政の仕組みや業務については第3章へ送る。</p>
11月19日	利府町文化交流センターリフノス	-	分科会	<p><研究活動></p> <p>パラグラフリーディング。</p> <p>[前文；原案の趣旨目的]と[第1章ー市民活動とは？～基本認識と定義～ー1. 市民活動とは]を精査。前文パラグラフGから1章-1のパラグラフCまで。市民活動のイベントの立ち位置、市民活動=無料イベント屋ではない。イベントだけでは団体のWhat、How、しか見えず中核であるWhyが見えづらい。イベントの「やりたい」人と「やってほしい」人のアンバランス感について。NPO法とNPO法人について、営利・非営利についておさらい。NPO法人の「収益事業はできるけど企業と競争させられると難しい現状」について。等々について議論。</p>

12月17日	利府町文化交流センターリフノス	-	分科会	<p><研究活動> パラグラフリーディング。</p> <p>[第1章；市民活動とは？1-1] を精査。パラグラフFまで。つながり、協働、協力について。組織のマネジメントからステークホルダーマネジメントの時代へ。「協力・協働」こそが市民セクターの最大の武器。</p> <p>「協働事業を行う人材、資金、時間諸々のリソースが足りないから、協働事業ができない」は誤りで「リソースが足りないから協働する」と参考図書著者の講演より。市民・行政・企業の各セクターの意思決定の仕組や基準の相違。等々について議論。</p> <p>参考図書：「協力のテクノロジー」(松原明氏)</p>
2月25日	利府町文化交流センターリフノス	-	分科会	<p><研究活動> パラグラフリーディング。</p> <p>[第1章；市民活動とは？1-2 私益・公益・公益とは？] 2024.9.17の旧市民活動研究会の記録を元にAIが下書きしたものを精査。1-2最終パラグラフまで。</p> <p>私益・公益・公益の相互不可分な実態について。私益の余剰エネルギーが公益を満たし、公益の余剰エネルギーが公益を満たす関係(元氣玉理論)。エネルギーは「無いところから取る(自己犠牲・搾取)」のではない。とすると優先的に満たすべきは社会の化合物の最小単位である「個人」となる(ソーシャルナノテクノロジー)。</p> <p>組織内の個人の摩擦(私益と私益の干渉)にどう対峙するか→日本は法治国家であり法令・条例がある。企業では従事者に対する就業規則や顧客に対する利用規約がある。市民活動にも定款や規約がある。摩擦があるときは定款や規約に回帰する必要があるため、実用性のあるものを皆で納得して策定することが望ましい。</p> <p>等々について議論。</p>
8月17日	野中一部公民館	11	coffee しゃべってみっぺ	<p>テーマ「フリートーク」</p> <p>町内の活動者、生活者としての町民、公民館職員、町・県の議員などが集った。</p> <p>自己紹介をしてからフリートーク後にそれぞれが隣り合った相手や話したい相手と自由に会話する。</p> <p>その中で抽出できたことが、</p> <p>地域の事例紹介: 多賀城市の「感謝の言葉キャンペーン」や、利府町の「日本ミツバチ飼育プロジェクト」など、他地域の取り組みや町のユニークな活動事例が共有。</p> <p>交流の広がり: Instagramや図書館などを活用した情報発信の試みも議論され、活動が次世代につながる可能性も注目。</p> <p>地域運営の課題: 参加者数の確保や固定メンバーの高齢化、町内会や老人会の「なり手不足」といった、共通の課題も浮き彫り。</p> <p>メニューはアレルギー配慮のカレーとサラダ、デザートにスイカ。</p>

9月24日	野中一部公民館	13	coffee しゃべっ てみっ ぺ	<p>テーマ「みなさんの地域でお祭りはどうしてますか？」</p> <p>町内の活動者、生活者としての町民、子育て中の方、自営業・経営者、地域おこし協力隊町、町の職員(町民協働係、)町の議員などが集った。</p> <p>お祭りを継続している、夏祭りから秋祭りに移行している、辞めているなど様々な運営事情をしゃべってみる。背景は地域コミュニティ組織の運営困難につながる。</p> <p>お祭り＝町内会がやらねばならない、という固定観念を捨て、時代の社会情勢に合わせて機能(お祭り、こどもたちが遊び学べる物事、高齢者の見守りなど)と制度(町内会、こども会、民生児童委員、PTAなど)の切り離しという発想の転換が提案される</p> <p>メニューはアレルギー配慮のカレーとサラダ、デザートに利府梨。</p>
11月12日	野中一部公民館	15	coffee しゃべっ てみっ ぺ	<p>テーマ「続・お祭りについて」</p> <p>町内の活動者、生活者としての町民、職場体験の中学生、町の職員(秘書政策係)、町の議員などが集った。年代層は中学生から70代まで。実施日の数日前に行われたお祭りについて話題にしてみた。地方紙に掲載された事柄など様々な立場が様々な姿勢、苦しい状況を提示した。</p> <p>お祭りは、古代において五穀豊穡や厄災の抑止を願うため、住民が“一心”になって行うようになったのが起源である。当時のライフスタイルは極めて均一的だった(例：朝起きて日中田んぼやって夜寝る)。しかし、現代は働き方改革や多様性の相互理解が浸透し、生き方、考え方が『人それぞれ』である世相にある。この多様性に富んだ現代で、いかに“一心”を生み出すか、これこそが私たち現代人の大きな宿題。</p> <p>メニューはアレルギー配慮カレーとサラダ。食後に利府珈琲茶寮さん提供のコーヒー</p>
2月18日	利府町文化交流センターリフノス	17	coffee しゃべっ てみっ ぺ	<p>テーマ「夢が叶う町ってどんな町」</p> <p>町内の活動者、生活者としての町民、名取市からの参加、図書館職員などが集った。</p> <p>アイスブレイクや自己紹介から始まってそれぞれの切り口から夢が叶う町の具体的な話題をしゃべりあった。子育て中のお母さんが、もっと当たり前休めるようになるには、不登校への考え方、法律の壁などが主な話題としてなぞられていたが、この中から新しい活動のきっかけにも立ち会えることができた。</p> <p>メニューはポークカレーと辛いキーマカレーのツインカレーに、ポトフ。</p>

(2) 利府町寺子屋

2022年度の市民活動研究会にて「ケース検討会」を行い、集会所の利活用やこどもの居場所づくり、多団体協働プロジェクトという複合した趣旨をもって発足したモデルケー

ス。2022年度から準備を重ね、2023年2月より集会所等を用いた居場所づくり活動を行っている。

【実施結果】

実施日	実施場所	参加人数	内容
4月26日	野中一部公民館	0	参加数0のため、スタッフの内部打ち合わせや事務作業の時間とした。
5月17日	森郷森林組合事務所	6	小学生の回。居場所としての深化を確認。特筆点は2点。①「参加の仕方」において、子ども単体だけでなく親子で参加するケースが見られ、地域コミュニティとしての信頼が向上。②「遊び方」では、雨天により屋外が使えない制限下で、大人が準備するのではなく「その場にあるもの」で遊ぶことを重視。不自由を創造力で補う、子どもたちの主体的な遊びが展開された。
6月14日	森郷森林組合事務所	9	中学生クラスを開講。初めての定期考査を目前に控え、過度な緊張感の中にいた中学1年生が中心の回となった。代表理事によるミニ講座では、テーマ「中学校最初のテストの心構え」として講話を実施。「亀仙流の教え」を引用し、「勉強や部活だけに偏った生活では、真に強くはなれない」と説いた。極論として「びびらない・へこまないこと」、そして「遊びや休む勇氣」を持つことの大切さで背中を押し、生徒たちが精神的なゆとりを持って試験に臨めるよう導いた。
7月26日	青山三丁目集会所	7	小学生クラスを開講。夏休み序盤の学習支援を実施。多くの児童が自力（徒歩等）で来場し、地域に根差した「身近な居場所」としての機能を果たした。この日は夏季休暇中の大学生ボランティアが多数参加し、事実上の「大学生とふれあおうDAY」となった。後半の体験活動では、大学生と共にパンケーキの調理、トッピング、実食を実施。世代の近い若者との交流を通じて、子どもたちが主体的に楽しみながら社会性を育む、多世代交流の理想的な形となった。
8月17日	野中一部公民館	7	中学生クラスを開講。冷房完備の良好な学習環境を提供し、夏休みの宿題を中心とした学習支援を実施。近隣生徒の徒歩通学を想定した会場選定であったが、結果として全参加者が保護者の送迎により来場した。これは、送迎の負担を負ってでも参加させる価値がある場として、保護者層への認知と評価が確立したことを示している。また、代表理事によるミニ講座を開講。独自メソッド「UCMI（ユニバーサル・カウンセリング・メソッド）」を伝授し、中学生同士でも実践可能な「相談の受け方」を学ぶ、専門性の高いプログラムも提供した。
9月6日	利府町文化交流センター リフノス	15	中学生クラスを開講。中学生としては過去最大の参加者数を記録した。創作室にて、生徒たちは学習や対話など、寺子屋での過ごし方をそれぞれが自分らしく選択し、場を使いこなす姿が顕著に見られた。活動の終盤には、生徒側から「次はいつですか？」「11月30日に開催してほしい」という自発的な要望が上がるなど、寺子屋が彼らにとって主体的に関わるべき「自分たちの居場所」として深く根付いたことを象徴する回となった。
11月8日	青山三丁目集会所	3	小学生クラスを開講。地域ボランティアが主体となり学習をサポート。後半は、まず屋外で遊具遊びや鬼ごっこを行い、外遊びを通じてリフレッシュを図った。寺子屋スタッフも童心に帰り全力疾走していた。その後室内へ戻り、パンケーキやお好み焼きの調理実習と実食を実施。大学生不在の中、地域住民と子どもたちが共に汗を流し、食卓を囲むことで、家族のような親密さと安心感のある多世代交流の場となった。

11月30日	利府町文化交流センター リフノス	5	中学生側の提案を受け臨時開講。定期考査を控え「勉強する場がほしい」という生徒自らの発案により急遽実施。運営主導ではなく、利用者の主体的なニーズに応えるという寺子屋の本懐に叶う形となった。学習の傍ら、女子中学生と女子大学生のテーブルでは、思春期ならではの淡い話題や悩みについても対話が弾むなど、信頼できる先輩との交流を通じて、精神的な充実も図られる貴重な機会となった。
12月21日	利府町総合体育館	12	仙台市天文台を招聘し天体観望会を実施。当日はあいにくの曇天により屋外での観測は叶わなかったが、室内にて移動式プラネタリウム等の機材を用いた星空解説や宇宙の不思議に関する講話、軽微な屋外用の観測機材体験を実施した。専門家との対話を通じ、科学への興味を深めると共に、冬休みの過ごし方、自主勉強の一助、冬の居場所としての豊かな交流の機会となった。

【特記】

プロジェクトそのものを多団体協働として立ち上げたため、第一義的なこどもの居場所づくりとしての機能も果たしているが、この寺子屋活動自体が地域の活動者または潜在活動者のハブとして二次的な効果を生み出しており、協力団体として現場に関わる団体や個人ボランティアは増えてきている。今年度は学生ボランティアの呼びかけを強化し県内の主要な大学に直接ボランティア依頼をかけ、現状では毎回の開催に大学生の誰かは配置できる状況まで至っている。

さらに今年度は中学生からのニーズ、中学生界隈への周知が高まり、中学生開講日としては過去最高である15名の参加も見られた。定期考査の直前に寺子屋の日取りを置くことにより相乗効果を創出できている。また、サードプレイスの提供という側面として学校や家庭で禁止されていることを解禁（スマホ、タブレット、PC、普通の音量でのおしゃべり、勉強中の飲食など）中学生それぞれが寺子屋の活用に積極的になり、「〇月〇日もやってほしいです」など、スタッフへ開催提案もできるように場の形成が行えた。

またこの活動費は前年度より参加児童から徴収する参加費を無償とし、町民や他団体からの寄付金、イオングループ「黄色いレシートキャンペーン」の助成、「公益信託仙台銀行まちづくり基金」の助成を受けながら活動を継続している。

(3) 受託事業「宮城県令和7年度NPOネットワーク構築事業」(宮城県)

前述した初めてのプロポーザル応募、初めて採択、初めての受託事業実施を経た。宮城県が公募した本事業を3つのエリアに分ち、北部A(主に宮城県中部、仙塩や黒川のエリア)、北部B(主に仙塩、黒川以北)、南部としたうち、北部のA・Bの2件を受託した。

事業概要は県内各地域において、NPOの活動促進を目的として、特定非営利活動法人や市民活動団体、企業や市町村などの関係団体等の顔の見えるネットワークづくりを目指した交流会を開催し、NPOと関係団体等との連携・協働による地域課題の解決を図るための基盤整備を行うもの。事業内容は仕様にて規定された交流会を主軸に展開した。A地域、B地域でそれぞれ2回ずつ、合計4回の交流会を実施。毎回ゲストを招聘し話題提供をいただき、その後にワークや交流の時間を設けて参加者それぞれのネットワーク構築に努めた。また現代は「協働のまちづくり」が謳われNPOだけの集まりでは地域課題の解決やそれぞれの主体の望みを実現することが困難であることは周知の事実であるため参加対象は「どなたでも」とした。

また仕様書内で認められた独自提案事業として「クルクル来る」を行った。これは従来でのNPO支援施設へ相談者が出向く手法から、相談対応者が相談者(≒NPO、活動者など)の元へ出向くという手法に転換したものであり、県内各市町村においての公的中間支援施設の有無や県の支援施設へのアクセスなどのハンデをなくし、どの地域においても相談が行えるという地域格差の解消を図ったものである。

同じく独自提案事業として「NET-MUGEN」というオンラインコミュニティを運営した。これは交流会という営みにおいて参加者が交流時間対していつまでも交流していたいという傾向と県の事業として県内様々な場所から来られるという状況を鑑みて、時間や場所の制約を受けないオンライン上の交流場を図ったものである。プラットフォームはSlackを採用した。理由は宮城県が策定中の第6次民間非営利活動促進基本計画においてNPO等地域課題に取り組む各主体のICT活用スキルアップを図る方針に基づき、郡部や郊外の活動団体が使う概ねのグループチャット「LINE」「Messenger(Facebook)」等からさらに一步高度なツールを活用することを期待したものである。

【実施結果】

事業期間は約半期(それぞれ9月下旬～10月上旬から3月6日の契約)であったが、その中でNPO等のネットワークの礎（意識や体制の整備）を醸成するのは非常に難しいが、交流会という刹那的視点では参加者と多くの学びや出会いを共有できたと考えられる。ただし、これには継続的なパートナーシップの支援や出会うまでの布石(前述の意識や体制の整備)がそれ以上に重要となる。また独自提案事業は本事業期間終了後も県との協議で自主事業として継続するなど、長期的な運用が求められる。この短い期間のなかでも相談事業において新しいプロジェクトの種、適切な支援機関への着地、新団体設立に立ち会えたことは成果と言える。オンラインコミュニティ「NET-MUGEN」ではリアルな交流会の熱量に追随するにはまだ工夫や時間を要する時期ではある(東北人である私達の民族性説もある)が長期的視点では活動者のライフラインとして機能するポテンシャルは持っている。

主たる仕様上の交流会については下表のとおり。

※様子の詳細についてはリフ超学校HPにて掲載中

実施日	実施場所	参加人数	テーマ	ゲスト	概要
11月21日	松島町文化 観光交流館 アトレ・る Hall	15	わた（ ） たちの余白	佐藤祥多氏 (NPO法人余白)	従前の「まちづくり」のイメージから本質へ迫り、自己と他者の関わりや仲間・コミュニティづくりについて考え、整理し交流。
12月13日	涌谷町公民 館 ホール	2	いくつものカオ でつながる	竹下小百合氏 (NPO法人ファザ ーリング・ジャパ ン、経営者、妻、 母ほか)	共働きや兼業(例：本業と地域活動)など1人多役が当たり前になった現代社会において、子育て当事者も対象に加え、そのいくつものカオを負担から強みに変えることを考え、整理し交流。

1月24日	富谷市まちづくり産業交流プラザ TOMI+イベントスペース	13	わくわくスイッチ設計大作戦	中村憲和氏 (一般社団法人わくわくスイッチ)	既存の活動者に対しては「todo、ニーズファースト」から「わくわくファースト」へ、これから何か始めたい方は「地域や社会のためにスタート」から「自分が楽しむためにスタート」へ。主にわくわくという無限のエネルギー(≒モチベーション)の分泌について考え、整理し交流。
2月21日	女川町まちなか交流感多目的室 A・B	9	持続可能なオレ/わたしたちへ	柴田北斗氏 (キャリアモデル開発センター仙台、東北はたらく幸せ研究所)	地域活動の特性である「無償性が高い」「有給スタッフであっても給与水準や雇用形態が不安」という課題について、自らの地域活動のキャリアを別の活動や業でも活用できるよう考え、整理し交流。

(4) 地域コミュニティ組織支援

昨年度から開始した地域コミュニティ組織支援として、今年度は葉山町内会と葉山老人会の相談に対応した。

- 葉山町内会

「町内会の若手を中心としたeスポーツ大会を開きたい」と相談を受け、会議の同席から当日運営、レトロゲームブースでの参戦という形で支援した。

- 葉山老人会(ひまわり会)

葉山団地が20周年を迎える2026に記念となる盆踊りを作りたいという相談を受けた。作曲・レコーディング・ミックス/マスタリング、プレス補助を作曲家ささきしょうた(兼・当法人代表) マッチングして伴走を行った。

2. 地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う事業

(1) リフ超学校インターンシップ

【趣旨】

宮城県利府町では地域課題として若者(18歳～20代)の転出意向が顕著であり、行政、企業その他地域一般では若者を既存の各主体の組織や事業に“呼び込む”“巻き込む”ことに重きを置いている。対して当団体では、“呼び込み”“巻き込み”の前提として若者が「学ぶ」「遊ぶ」「働く」「住む」「集う」という「受け皿」が必要と考えている。そのために2019年度は若者同士の20代交流会を実施し、2020年度のコロナ禍以降、「集う」ことが困難な状況下になってからは、若者(特に学生)ひとりひとりの内省を支える伴走を行うため、「働く」の支援としてリフ超学校インターンシップを行っている。学校の求人票や大手求人サイトには掲載されないような地域性に富んだ事業所から協力を得て、1日ないし数ヶ月のインターンシッププログラムを実践することにより、生きることを哲学的に考える一助として機会を提供している。

【実施結果】

今年度は更にインターンシッププログラムを拡充し、具体的な選択肢を増やしつつも実質は学生一人ひとりに沿ったオーダーメイド式を採っている。キャリア相談のみの他1件のインターンシッププログラムを受け入れ、継続中。1名がプログラム(オーダーメイド)開発の相談中となっている。今後も企業セクターとの数奇なつながりを待つ姿勢ではなく、自法人(リフ超学校内)で学生のキャリア(生き方)の指針が少しでも解像度を上げられるよう創意工夫し、いわゆる「自前インターンシップ」と「オーダーメイド」を掛け合わせた展開を行った。

結果4件のプログラム作成、のべ5名の相談、1件の実動が出来ている。

プログラム件数：4

実施期間	実施者	受入事業所	コーディネーター	内容
(募集中)	(募集中)	株式会社Studio-Sola	NPO法人リフ超学校	音響のオペレーション技術のインターンシップ

(募集中)	(募集中)	NPO法人リフ超学校	NPO法人リフ超学校	利府町寺子屋のプロジェク リーダーアシスト
7月21日～ 現在	大学3年生	作曲家 ささきしょうた	NPO法人リフ超学校	DTMの基本技術から社会との接 続(成果物の納品)まで
相談中	高校生	NPO法人リフ超学校	NPO法人リフ超学校	利府町の地域課題解決に関する 活動

(2) キャリア相談

相談件数：5件

相談者層：大学生

相談概要：将来、音楽関係の仕事をしたい、まちづくりに関わりたい等

3. 住民が自由度の高い芸術・思想活動を行うための機会創出事業

(1) RIFU ROCK FEST.

【趣旨】

利府町は近年の行政セクターと企業セクターのサービス拡充が飛躍的であるが、市民との関わりにおいてはサービスの提供者と享受する側との二極化が進むという側面があり、次の時代で市民協働のまちづくりを実現するにあたり、市民ひとりひとりが社会との関わりや自己実現を目指す主体性を育む必要がある。また主体的に社会活動や文化芸術活動に勤しむ市民の努力が露見される機会が多く必要であるため、当団体では2017年度より、その市民の努力を露見する場として、特に「音楽×まちの賑わい」という観点から本事業を行ってきた。年度ごとに多様な個人・団体が実行委員として活躍しており、その層も学生や教育関係者、市民活動・文化活動実践者、その他一般の町民と多岐に渡っている。

その中で、本事業は

1. コロナ禍の長期化において失われた対面での人材交流の機会を創出すること
2. 利府町を文化活動、社会活動、経済活動の各領域において、だれもがはじめての一步を踏み出せるチャレンジングな地域へと社会変革するため、この3領域のチャレンジャーに対して自己表現、自己実現の機会を創出するとともに、特に若い世代の自己肯定感、自己重要感の醸成すること

を目指す。

【実施結果】

昨年同様、本事業(イベント)に対して企画運営を行う実行委員の募集から事業が始まった。昨年と同じく、町民のイベントやサービスに対する主体性(能動性)を育むため「5名以上実行委員希望者が現れなければイベント自体を実施しない」という制約を設け10月1日から同月末10月31日までに6名の実行委員が集った。6名中4名が昨年度からの継続参加だった。実行委員の人数や組織規模の縮小、各自のリソースの有限性のため、活動のスリム化を図り持続可能な実効性を目指した。

会場選定は実行委員が経験値を活かしやすく自己有用感を感じやすくする目的と実務のスリム化、施設の利便性を考え、今年度も利府町総合体育館サブアリーナとなった。実行委員会は<音楽><フロア><広報>のチーム制を廃止し、全セクションを全員で分野横断し、少しずつ考えるSFO(Seamless and Flexible Organization)システムを採用。月に1回の全体ミーティングで現在地の確認と次の目的地、航路を可視化してきた。音楽セクションは、かねてからの周囲からのニーズ「若者や地元の人を増やしてほしい」という声に応えるため、今年度も若者に出演権のある「U-22枠」、地元の文化活動者に出演権のある「地域枠」、その他誰でも参加ができる「一般枠」を設置した。前年度まで「U-20」としていた枠は、大学生もカバーしたいという実行委員の総意で「U-22」へとリニューアルした。フロアセクションは昨年度同様、出展者が心地よく活動できる視点と、実行委員メンバーがライフワークバランスを取れる負担の分量という視点の両面から募集枠を昨年度同様15へと留め募集を行った。広報セクションはチラシの作成者が前年度までと変わったため、新しいメンバーのセンスでまた異なる雰囲気のチラシ作成が行えた。また実装には至らなかったものの、新メンバーの発案ではチラシ裏面の企業広告枠とコスプレ団体とのコラボ企画などのアイデアも上がった。

当日は場内の様子は前述の出演者・出展者で賑わい、昨年度比として若干来場数減は見られたものの、目視のみでもわかるほど多くの来場者で賑わった。広い会場を使用したことで単純な出演者・出店者のPRのみならず、実行委員、当日ボランティア、来場者まですべての属性が群像劇的に相互交流し、ネットワークづくりを行い、新年度の自活動がステップアップするための足がかりとしていた。また、出演者・出展者各位から多くの御礼メー

ルを頂いたことが今年度の特記のひとつであった。出演者は組数は前年同等だったが、1組あたりの人数が多いため計43名がステージパフォーマンスを行えた。

RIFU ROCK FEST.2025			
実施日	実施場所	参加者数	内容
3月28日	利府町総合体育館 サブアリーナ	実行委員 6名 当日のみのボランティア 8名 出演者 9組43名 出展者 13組20名 協力者 1社2名 当日来場者 約170名	<ul style="list-style-type: none"> ● 若者が演奏する「U-22枠」、地元のバンドやアーティストが演奏する「地域枠」、その他誰でも参加できる「一般枠」の演奏者によるライブ演奏9組。 ● ライブ演奏を体育館の広い空間を使って彩る物販・ワークショップ・展示・等の出展者13組。

3. その他、当法人の目的を達成するために必要な事業

(1) 各種情報発信

【実施結果】

ホームページ、SNS、紙チラシを活用し、年間を通して、自団体の活動のお知らせ、参加者募集や各イベント・プロジェクトの実施結果や分析をレポートした。新しいステークホルダーの獲得、各事業や市民活動そのものへの参画や事例の周知として機能させた。

また、SNSを活用し町内で活動する他団体の活動現場に赴き、その様子を発信した。町内各所に周知することはもちろん、NPOの公的中间支援のない町として、その町内でも市民活動が存在することを町外、県外に周知するための機能とした。

また、今年度は2月8日に衆議院解散総選挙と同日に利府町長の任期満了に伴う選挙が合ったため、利府町長選挙部分のみ、ツイキャスにてアンオフィシャル選挙特番「」を行った。政治の論理や枠組みを使わず、日々の生活の困りごとなどを軸に選挙を視聴者と語った。

当法人の事業(プロジェクト)が多方面に拡大する副作用として、一見何の団体かということがわかりづらく、大きな1枚のリーフレットで可視化するため、「1枚モノプロジェクト」を立ち上げる。リフ超学校学校が中間支援組織であること、中間支援とは、市民活動とは等を盛り込んだほか、プレイヤーサイドのプロジェクトも幾つか持っていることを見分けできることが主目的。年度内作成を目標としているが、目下制作途上である。

(2) 各種相談

【実施結果】

他団体や個人活動者、潜在的な市民活動者からの活動相談や受益者の相談、および当団体が市民のだれもが参加できるプロジェクトとして稼働させているものへの参加希望の相談、受益者からの相談、行政や公共施設指定管理者、メディア掲載・取材の相談が寄せられた。そして今年度は前述の受託事業「宮城県令和7年度NPOネットワーク構築事業」の中に、独自提案として「クルクル来る」(移動訪問型相談)を盛り込んでいたため、相談者のエリアが前年度までよりさらに県域と拡大した。また、『地域の次世代を担う若者の「遊び」「学び」「働き」「住まい」「集い」の環境整備及び人材育成を行う事業』と連動する学生や若者からのキャリア相談、学生生活や人間関係の相談も寄せられた。相談に対し代表や理事を中心とした当団体スタッフが対応し、助言や適切な主体へのマッチング等を行った。

相談件数：66件72名

相談者層：学生、市民活動団体(または個人活動者や中間支援組織も含む)、行政、企業、受益者、メディア

相談概要：新規市民活動団体立ち上げ相談、市民活動運営相談、他セクターと市民との協働についての相談、イベントを共同運営できる専門職とのマッチング相談、他セクターから見た市民活動の定義・意義に関する相談。受益者からの日々の困り毎。学生の卒業の進路選択について、地域や社会や仕事を少しでも体験できる機会について、学校生活の活用方法についての相談など。

(3) 行政との協働事業

【実施結果】

(利府町)

昨年度に引き続き、行政の担当課(利府町町民生活部生活環境課町民協働係)をパートナーとし、前年度から継続の市民活動支援活動を行った。

- ① 利府町庁舎エントランスホールへの利府町町民公益活動団体(要登録)専用のチラシラックの設置
- ② 利府町HP内への利府町町民公益活動団体(要登録)紹介ページの設置

(宮城県)

令和7年度NPOネットワーク構築事業受託(既出)

以上。